

# 高温に対する農作物等管理技術対策について

令和4年6月30日  
埼玉県農林部

関東地方は平年より22日早い6月27日頃梅雨明けしたと発表がありました。

6月23日気象庁発表の1か月予報によると、向こう1か月（6月25日～7月24日）の平均気温は高くなる見込みです。

そこで、高温対策として以下の農作物技術対策資料を作成しましたので、参考にしてください。

また、高温・高湿下での農作業は、熱中症を引き起こしやすいので注意してください。

## 水 稲

- 1 高温時の除草剤田植同時処理は薬害を生じる恐れがあるので、田植後速やかに入水する。
- 2 高温により雑草の葉齢の進展も早まることから、特にノビエの葉齢に注意して除草剤の散布を適期に行う。
- 3 必要な茎数が確保できるまで浅水で管理し、茎数確保後は速やかに中干しを開始して田面に小ひびが入る程度までしっかりと干す。
- 4 中干し終了後は、間断かん水で根を健全に保つ。
- 5 基肥一発施肥体系でも葉色の低下が著しい場合は追肥を検討する。
- 6 イネツトムシ等の害虫の成育が早まるので、病害虫防除所の発生予察等を参考に適期に防除を行う。
- 7 畦畔の草刈作業等は、農作業事故に注意するとともに、朝夕の涼しい時間帯に行い熱中症を予防する。
- 8 「彩のかがやき」について  
高温障害を受けやすい品種であり、特に注意する。

### 【早植栽培（基肥＋施肥体系）】

通常は中間追肥を行わないが、移植後40～45日頃の葉色が4.5（群落）を下回った場合は直ちに窒素成分で2kg/10a程度を追肥する。ここで葉色が低下しすぎると、穂肥を施用しても回復しにくくなるので、必ず診断を行い、必要な場合は追肥を行う。

【参考】平成28年3月作成 暑さに負けない「彩のかがやき」栽培指針を参照してください。

<https://www.pref.saitama.lg.jp/documents/70308/sainokagayaki-sisin.pdf>

## 大豆

- 1 コンバイン収穫体系のは種適期を迎えているので、耕起からは種、除草剤散布を一貫作業で効率的に行う。
- 2 高温・乾燥時には種は大粒品種ほど吸水・出芽に時間を要し、生育が不揃いとなりやすい。降雨の週間予報や土質及び土壌水分を考慮してなるべく砕土率を高めたり、通常よりもやや深めには種することで土壌中の水分を有効に活用する。
- 3 火山灰土壌のような軽くて乾燥しやすい土壌の場合には、は種後鎮圧を行う。
- 4 は種後にかん水は行わない。

## 野菜

### ◎共通事項

- 1 露地野菜では、敷わら、マルチ、べたがけ資材等を使用して、地表面からの水分の蒸散を抑制する。
- 2 は種又は定植期にあたる野菜では、降雨を待つか、十分かん水を行って作付けする。は種又は定植は日中の暑い時間を避け、涼しい早朝か夕方に行う。
- 3 高温乾燥条件下で発生しやすいハダニ類、アブラムシ類、アザミウマ類等の早期発見に努め、的確な防除を行う。
- 4 開花前後、肥大期等乾燥による影響が大きな生育ステージにある作物では、可能な限りかん水を実施する。
- 5 施設・育苗ハウスでは内外部の遮光遮熱資材により温度の上昇を抑制し、循環扇等により通風を図る。

### ◎露地なす

- 1 高温・乾燥が続くと「つやなし果」や「短形果」等の不良果が増加するので、敷わら等により乾燥を防止するとともに、適宜かん水を行って草勢維持に努める。
- 2 生長点付近の先端部分が細くなるなど草勢の低下がみられる場合は、追肥や不良果の摘果を行って、草勢の回復を図る。
- 3 ハダニ類、ミナミキイロアザミウマ等の発生に注意し、発見次第薬剤防除を行う。その際、整枝・誘引と摘葉を行って薬剤の付着効果を高める。

### ◎ねぎ

- 1 生育が遅延している育苗ほについてはかん水を行い、生育促進を図る。
- 2 定植初期は乾燥の影響が大きいいため、かん水チューブ等によるかん水を行い、活着促進を図る。ただし、過剰かん水には注意する。
- 3 ネギアザミウマ、ハモグリバエ類、シロイチモジヨトウ等の発生に注意し、発生初期から薬剤防除を行う。

## ◎さといも

- 1 畑かん施設があるほ場では、1回当たり20～30mm程度のかん水を行い生育促進に努める。
- 2 土壌が極度に乾燥している場合は、追肥や土寄せ作業を行わない。
- 3 高温乾燥によりアブラムシ類やハダニ類が発生しやすくなるので、発生初期から薬剤防除を行う。

## ◎えだまめ・スイートコーン

- 1 開花前後及び肥大期のものは、可能な限りかん水を実施する。
- 2 アブラムシ類等の発生に注意し、発生初期から薬剤防除を行う。

## 果 樹

- 1 晴天3日に1回の間隔で積極的に灌水を行う。1回概ね20mm程度で行う。日中の高温時を避けて、夕方の時間帯に行うのがよい。
- 2 草生栽培園では、定期的な刈取りを実施する。
- 3 清耕栽培園では樹冠下に敷きわらを行い、地温上昇と地表面からの蒸散を防ぐ。
- 4 ハダニ類やナシヒメシンクイ等は、発生時期が早まり、発生量も多くなるので、園内をよく観察し、初期発生時に防除を行う。

## 花植木

- 1 露地切花は、可能な限りかん水に努める。
- 2 敷わら等により地表面からの蒸散を抑制する。
- 3 寒冷紗等の遮光資材を活用し、植物体温度の上昇を抑制する。
- 4 施設では内外部の遮光資材により温度の上昇を抑制し、循環扇等により通風を図る。

## 茶

- 1 マルチ、敷きわらなどにより土壌水分の保持に努める。また、雑草による水分の競合を避けるため除草を行う。その場合、細根を切るような深い耕うんは避け、表面を軽く耕うんする程度に行う。
- 2 日中、高温時の整せん枝や農薬散布は葉焼けや薬害を生じる恐れがあるので農薬散布は比較的気温が低い朝夕等の時間帯に実施し、整せん枝は夕方に実施する。
- 3 棚施設などが設置された茶園では被覆遮光し、葉焼けなどの高温害を防ぐとともに過度の蒸散を抑制する。
- 4 定植当年の幼木は干ばつ害が懸念されるため、新植ほ場ではかん水、マルチ・敷きわらなどの対策を実施する。また寒冷紗などで遮光が可能ならば設置する。枯死個体が発生した場合は、翌春補植する。

- 5 チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマ、カイガラムシ類が多発することがあるので、適切に防除する。

## 畜産

- 1 密飼いを避け、畜舎の屋根や壁面への石灰乳または断熱塗料の塗布、畜舎周囲への遮光ネットやよしずの設置、換気扇・送風機利用による畜舎内の通気促進などにより、飼育環境を改善する。
- 2 次のような、高温に対応した使用管理を行う。
  - ・冷たい水が十分に飲めるようにする。
  - ・涼しい時間帯に飼料給与するとともに、給与回数を増やす。

御不明な点は、最寄りの農林振興センター農業支援部までお問合せください。

◎農薬はラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を十分確認の上、最終有効年月までに使用してください。

◎農薬の使用に際しては、以下のホームページで御確認ください。

- ・農林水産省 農薬登録情報提供システム  
<https://pesticide.maff.go.jp/>

◎農作業中の熱中症にご注意ください。

<http://www.pref.saitama.lg.jp/a0903/keieitai/nousagyouannzen/nettyuusyou.html>